



抜文

「三人とも孤独だった。興味深いのは、それを埋めるための行動はそれぞれ違っていたということだ。佐伯は異性と付き合うことでそれを埋めようとした。春日は憧れに思いをはせることで埋めようとした。仲村は向こう側へ行くことで埋めようとした。(略) 光だった佐伯は春日に町に止まることを訴えた。闇だった中村は町から出ることを訴えた。闇は進む力がある」

語って欲しいバンドを語ってくれない音楽雑誌やライターに我々、は反旗をひるがえそう！

これは、神聖かまってちゃん評である。そ、ニートの。。

音楽の文脈を知っている音楽ライターが書かないから、

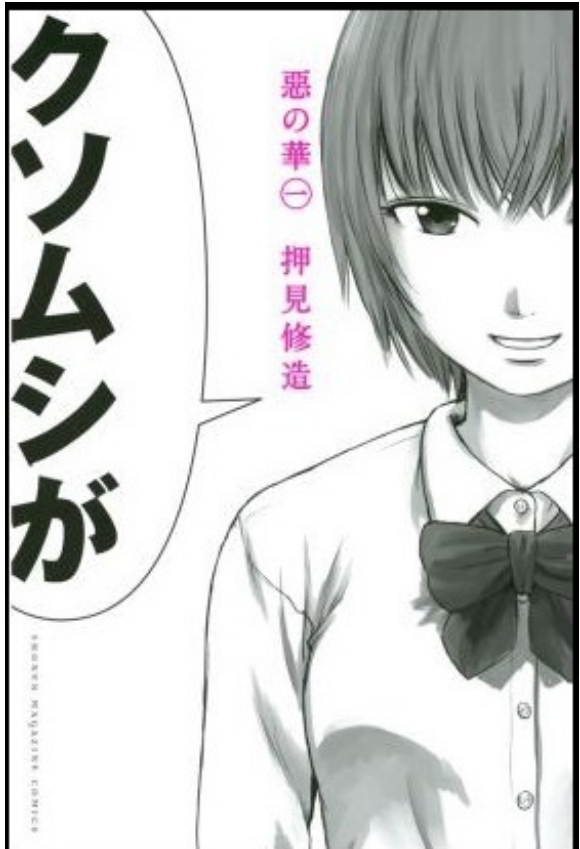
20代のks底辺が違った角度から「神聖かまってちゃん」評を紹介します。

今回は、押見修造の『**悪の華**』を軸に、**神聖かまってちゃんの**

パワーについて語っていきます。

【 悪の華 と 神聖かまってちゃん 】

心に悪の華をもつすべての同士に



クソムシが

悪の華① 押見修造

SHUNEN MANGA SHI

あらすじ

内容をざっと紹介する。

ボードレールに陶醉し、文学を読みあさりながらも友人と平凡な日々を過ごす中学二年生「春日（かすが）」。

忘れ物を取りに戻っただれもない教室で、密かに思いを寄せる「佐伯（さえき）」の体操着のに入った袋が目にとまる。気がつくと、手を伸ばして、持ってかえってしまう。

クラスのなかでも浮いている女子「仲村」に体操着を盗んだところを見られていた。佐伯に罪を告白して謝罪するといいつつ実行できない春日を、中村は「変態」と罵る。体操着のことを黙っている代わりに、春日の心の奥にあるドロドロした感情を引きずり出すことを決めた中村はそれを「契約」と呼び、春日は仲村に翻弄されていく。ふとしたきっかけで春日は佐伯とデートすることになる。仲村は、春日に盗んだ佐伯の体操着を服の下に着てデートすることを強要する。

机の上にコミュニケーションのバリケード

この物語をドライブさせているのは「孤独」である。

主人公の春日は歴史に名を残す小説や誌集を愛していて、とくにボードレールの悪の華は教室でカバーもかけずに読んでしまう男の子だ。



ただ、ぼくの場合は高校時代、教室の片隅で文学や誌集ではなくロックンロールやパンクなどを広げて、机の上にコミュニケーションのバリケードを築き「知ってるやつなら友達になってやってもいいよ？」と油断なくまわりをうかがっていた（その頃一生懸命人との接点を探していたはずだが、当時の日記を読むと早々にやけくそになっている。もう少しがんばれよ...）。



↓

春日

春日は友達がいらないわけではない。
休み時間しゃべったり一緒に帰る友達もいる。
なのに、強烈な孤独を感じている。



自分がハマっていることを語れないからだ。
それは、自分が自分でいられないということである。
それさえもまた自分なのだ、だとかを言う大人もいるが、ぼくの感覚だとそれはぜんぜん救済の言葉ではないし、その言葉で救われなかったことに対して、おれはどうやらかなりダメらしいと思ひ、さらに孤独を深めてしまう。
だれもない空間に独りであるより、大勢がコミュニケーションを交わしている中独りである方が辛い。だれにも共有してもらえない孤独。
言い変えるなら「大勢の中の孤独」といえる。
春日は孤独を持っていた。↓

佐伯

佐伯は成績優秀、ルックスの良さと、おしとやかな雰囲気をもつ。

性格は真面目かつ保守的で、常識や社交性も十分に持っているため、先生も彼女にクラスの仕事を頼むほど信頼感がある。



しかし、春日が佐伯に告白したとき、彼女の真意が初めて語られる。

「成績が良くて良い子」の外側をみて評価されているから苦しいというのだ。

みんなが思っているほど根が真面目というわけではなく、真面目な行動をしていたら真面目に思われてしまっていたのだ。

そうして段々と積み上がった良い子という評価に、

佐伯は自己像とのギャップでとても苦しんでいた。

佐伯も孤独だった。↓

仲村

テストでわざと名前を書かなかったり、教師に「うっせークソムシ」と反抗してクラスから浮いている仲村。

彼女は自分の住んでいる町を憎んでいた。

自分以外の人間すべてを憎んでいた。



「つまんないつまんないつまんない」「どいつもこいつもセックスセックス、セックスがしたいだけ、きれいごと吐きやがって」と春日に感情を爆発した場面がある。春日が仲村の命令を拒否したからだ。

彼女はクラスでは感情を出さない。

世界なんてさっさとぶっ潰れればいいと思っている。

仲村も孤独だった。

三人とも孤独

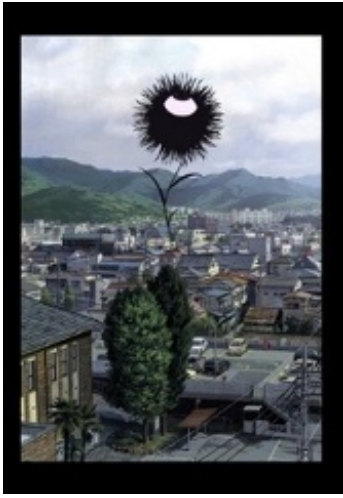
三人とも孤独だった。

興味深いのは、それを埋めるための行動はそれぞれ違っていったということだ。

佐伯は異性と付き合うことでそれを埋めようとした。

春日は憧れに思いをはせることで埋めようとした。

仲村は向こう側へ行くことで埋めようとした。



の子の作る音楽には孤独の香り

ロックンロールとは孤独な人間のためのものである。

とくに、神聖かまってちゃんはそうだ。



の子の作る音楽には孤独の香りが付きまとう。

暗い曲も明るい曲もそうだ。

しかし、それでも何かつかもうと手を伸ばしている様子の子の作る曲と、神聖かまってちゃんの鬼気迫るライブを観て感じられる。

それにリスナーは共鳴する。

これは『悪の華』に例えられる。↓

『悪の華』に例えられ

これは『悪の華』に例えられる。

孤独でもロックンロールに出るような音楽を好きにならない人間がいる。それが佐伯だ。

佐伯はきっと神聖かまってちゃんを好きにならない。

佐伯は一般人だ。

彼氏と一緒にサマソニへ行ってサカナクションを見てるタイプである（佐伯は音楽誌の存在すら知らないはずなので、あえて）。

仲村は神聖かまってちゃんだ。

孤独と闇をかかえながらそれを推進力にして手を伸ばしているさまが重なる。

春日はロックリスナーだ。

闇をかかえて、そこから出ることが出来ずもがいている。

仲村は闇を推進力にして、光（絶望）から山の向こう側（希望）へ

仲村は闇を推進力にして、光（絶望）から山の向こう側（希望）へ行こうとしている。

春日は同じような人種である仲村が、一足早く向こう側へ行こうと手を伸ばしているさまに惹かれてしまう。↓

まとめ

光だった佐伯は春日に町にとどまることを訴えた。

闇だった中村は町から出ることを訴えた。

光に進む力はない、

ただ止まる力があるだけだ。見えているようで重要なことが見えない。

闇は進む力がある、

推進力がある。闇があるから本物の光が見える。

神聖かまってちゃんの楽曲には光を想像させる神々しい曲がいくつかある。それは、闇から手を伸ばして（自分達にとっての）何かを必死でつかもうとする様子に見える。↓

心に悪の華を宿してる者が最後に勝つ。

孤独かつ闇を心にもっている者こそ何かを掴むことができる。

それを神聖かまってちゃんは教えてくれる。

息苦しい光の中でもがいているリスナーを山の向こう側へ向かわせる力が奴らにはある。

心に悪の華を宿してる者が最後に勝つ。



ド変態こそ最後は勝つ！ 神聖かまってちゃんの「悪の華」

<http://p.booklog.jp/book/81763>

著者：yuugata222

(臆病者ですが) ツイッターやっています。。

<https://twitter.com/miraiarisu>

フォローしてもフォローされないよおお・・・

今作の感想はこちらのコメントへ (ツイッターに軽くコメント頂けたらありがたいです(´・ω・`))

<http://p.booklog.jp/book/81763>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ